

「告白を神へのいけにえとしてささげ、いと高き神に満願の献げ物をせよ(詩篇 50:14)」。

「満願の献げ物」とは神に告白すること。精一杯の献金や人生を賭けた献身ではなく、神への告白。えっ、そんな事でいいのか、それなら難しくない、と思うだろうか。「苦難の日、わたしはお前を救う(50:15b)」。

救われるのは、苦難の内にある人で、しかも「神への告白」という満願の献げ物をした人か。それにしても、実際どんな人が救われるのか。敬虔な者、善良な者、貪欲でない者、高潔な者、嘘をつかない者、善行を積んだ者、聖書をよく読みよく祈る者だろうか。救われないのは、その反対の者か。

「それから、わたしを呼ぶがよい(50:15a)」。神を呼ぶ。どんな人が神を呼ぶのか。

善行や高潔さは意志と努力で身に着く人間の力だ。敬虔さや聖書の理解も人間の力であって、「わたし(神)を呼ぶ」こととは違う。

いやむしろ、そんな立派な能力を持ちえない貧しい者が「神を呼ぶ」のかもしれない。生真面目な信仰者にも罪があり、神の義から遠く、敬虔という手柄は「満願の献げ物」にはならない。

「神へのいけにえである告白」を私たちは知っている。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか(マルコ 15:34)」。これこそ人間となった方の、人間としての「満願の献げ物」ではないか。

それでは、マザー・テレサのような人は神に愛される聖女ではないのか。いや聖女であろう。聖女であるのは、偉大な救済事業を成したからではない。「苦難の日々(詩篇 50:15)」に無力な罪ある者として「わたし(神)を呼び続けた(50:15)」がゆえに聖女なのだ。

その祈りと行動はイエスの時代を彷彿させ、結果として世の耳目を引き「そのことによって、お前はわたしの栄光を輝かした(50:15)」。だが世はその本質を麗しい人間の業績で覆い、「神の栄光」を隠している。アフガンの中村哲の場合も。

「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている(ロマ 7:19)」。これを書いたパウロは頑固一徹である反面、自己理解は率直でしなやかだ。だから「わたしの肉には、善が住んでいないことを知っている。善をなそうという意味はあるが、それを実行できない(7:18)」と実に正直。

神はパウロをして、「それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのだ(7:20)」と語らしめた。そしてその引き裂かれた自己を激しく嘆いている(7:23~24)。こんな嘆きが「神への告白」。

私たちは何の手柄も立てず、罪人のままで、キリストの十字架と復活に与って義とされる(4:25)。救いはそこにある。「それから、わたしを呼ぶがよい。苦難の日、わたしはお前を救おう(詩篇 50:15)」。苦難の日々にあってなお神に救い出される。

パウロにとってその実感はこうだ。「死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはおらず、悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてを所有している(IIコリント 6:9~10)」。

五百年前、M.ルターはパウロの諸文書に出会い、宗教改革の扉を開けた。ここからプロテスタント教会が始まる。

熟知していたはずの御言葉が、聖霊となってルターの硬直した苦難を吹き抜けたのだ。



《おまけのひとつ》

悲しみながら喜び 無一物のまますべてを所有している 事態はそのままに モノクロ映像が鮮やかな画面になるように 十字架が復活に反転するように そこから 閉塞した現実も変わっていく